



# 2016

# 国語

## 注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言葉の最初の音がつかえてうまく話すことができない「シラ」（少年）は、野球部に所属し、友人の「マサ」達と中学一年の頃から共に練習に励んできた。一方、三年の六月に転校してきた「大野」は、すぐにレギュラーに選ばれ、そのせいでレギュラーから外された「マサ」を中心に野球部のメンバーからは快く思われていない。そんな中「シラ」だけは「大野」のことをいつもかばっていたが、中学最後の大会の前日、「シラ」は「マサ」にレギュラーを奪われてしまう。

マサは「シラのぶんもがんばるけん」と言った。少年は黙って、笑いながらうなずいた。Vサインを返してやろうとしたら、視界の隅のほうで、大野がこつちを見ていることに気づいた。① 目が合うとすぐにうつむいてしまったので、表情までは読み取れなかった。

帰り道は、大野と二人で用水路沿いの道を歩いた。言葉にして誘い合ったのではなく、ばらばらに部室を出て、正門を出たあたりでなんとなく一緒になって、「おう」も「よう」もなく、並んで歩きだしたのだった。

大野は口数が少なかった。少年もほとんどしゃべらない。② どうしていいかわからない。からっぽのバッターボックスと誰もいないベンチが、ぼんやりと浮かぶだけだった。

いつもの駄菓子屋を、二人とも黙って通り過ぎた。

最初の交差点にさしかかる。大野はまっすぐ渡った。

二つ目の交差点でも、大野は帰らなかった。

三つ目の交差点——もうええけん、遠回りになるけん、ここで帰れや、と少年は言おうとしたが、「遠回り」と「ここ」と「帰れや」の代わりの言葉を探しているうちに、大野はまた、横断歩道をまっすぐ渡った。

そして、最後の交差点。

大野は横断歩道の手前で立ち止まった。③ 右手で提げていたスポーツバッグを足元に、落とすように置いた。

「シラ……」

少年も足を止めた。大野は右手を胸の高さに持ち上げて、左手で右の拳を包み込んでいた。

「俺……<sup>(注1)</sup>ノックのときに突き指しちゃった」

大野はへへツ、と笑う。「嘘じゃない」とつづけて、「さっきから我慢してただけど、死ぬほど痛くてさ……」と、今度は顔をしかめた。少年はなににも応えず、大野の手元をぼんやりと見つめる。

「明日の試合、休むよ」

大野がそう言っても、少年は目も口も動かさなかった。

「バチが当たったんだよな、俺、『ウルトラマン』の怪獣だから、最後はやっつけられるんだよ」

少年は黙っていた。身じろぎもせず、ただ、黙り込んでいた。

「先生に、明日、言うから」とつづける。④大野の声は急にか細くなって、「だって……痛くて、たまんないんだよな……」と、さらに弱々しくなった。

少年は軽く息を吸い込んで、「がんばれや」と言った。嘘のように言葉がなめらかに出た。ひとりごとのようにしゃべったから、なのかもしれない。

大野は泣きだしそうに顔をゆがめた。

「俺、出ないって、ほんとに。シラを補欠にしてまで試合に出たくないって。俺のせいなんだからさ、いいんだよ、俺はもともといなかった奴なんだから。俺がいなくなったって、元に戻っただけだろ？ それでいいし、そっちのほうがいいんだよ、絶対」

「アホなこと言わんでええけん……」

「信じてくれよ」

「大野、アンダーシャツ、返せや。試合はええけん、シャツ返せ」

返せの「カ」が、すんなり言えた。声は大きくても、これはぜんぶひとりごとなのかもしれない。

「早よ返せや、わしのシャツなんじゃけん」

少年は、ほら、と右手を出してうながした。大野はなにか言いたそうに口を開きかけたが、すぐに閉じて、「洗濯してから返すよ」と言い直した。

「そげなことせんでええけん、早う返してくれ。いまあるんじやろ、早う返せや」

ほら、ほら、と右手を大野の胸の前に突き出した。言葉はすらすら出てくる。でも、⑤耳に聞こえてくる声は、自分の声ではないみたい

にひらべったく、薄っぺらだった。

大野はもうなにも言わなかった。スポーツバッグの前にしゃがみ込み、ファスナーを開けて、しわくちゃに丸めたアンダーシャツを出した。膝の上で畳み直そうとするのを、少年は「ええけん」と制して、ひたたくるようにシャツを取った。汗で濡れている。酸っぱいようなにおいもする。

⑥ 捨てるつもりだった。シャツを用水路に放り込んで、大野にもう一度「がんばれよ」と言ってやって、その代わりに、もう立ち止まらずに交差点をまっすぐ渡るう、と思っていた。

シャツのおなかのところに、黒い染みがあった。

違う、それはサインペンの文字だった。

④ Never Give Up——あまり上手くない筆記体で書いてある。

あきらめるな、と書いてある。

「シラ……ごめん、俺、もらったんだと思って、書きちゃった」

大野は「弁償するから」と付け加えて、「ほんと、ごめん、すみません」と頭を下げた。

少年はおなかの文字を包み込むようにシャツを丸めた。

大野は頭を下げたままだったので、少年が、シャツをスポーツバッグに入れ直した。ネバー、ギブ、アップ、と心の中でつぶやいた。ネバー、ギブ、アップ、と繰り返して、ファスナーを閉めた。

「もうええけん」と声をかけると、大野はやつと顔を上げた。目が合う前に、少年は背中を向けて歩きだした。

振り返らずに、大野に言った。

「がっ、がっ、がっ……」

⑦ 言葉がつかえてほっとしたなんて、生まれて初めてだったかもしれない。

「がんばるから！」大野は少年の背中に答えた。「ほんと、俺、明日がんばるから！」

少年は歩きながら、前を向いたまま、うなずいた。

でも、ほんとは、大野は勘違いしていた。少年が言いたかったのは、「がんばれ」ではなかった。

がんばるけん——自分のことを言いたかったのだ。

(注1) ノック…バットで軽く打ち出された球を捕る、野球の練習法。

(注2) 『ウルトラマン』の怪獣だから…「大野」は転校生である自分のことを、野球部の平和を乱した「怪獣」のような存在だと考えている。

(注3) アンダーシャツ、返せや。…シラ達の野球部は上下関係が厳しく、黒いアンダーシャツは三年生だけが着ることが許されるのだが、白いシャツで練習していた大野を見かねてシラは自分の物を一枚渡していた。

(注4) Never Give Up…「ネバーギブアップ」と読み、「決してあきらめるな」という意味を表す。

(注5) 筆記体…英語のくずし文字。

問一 波線部 a・b の意味として最も適当なものをそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a 身じろぎもせず

ア すぐに反応できず  
イ じつと動かず  
ウ おろおろ慌てないで  
エ おどおど周りをうかがわず  
オ ぎゅつと体を硬くしないで

b 制して

ア 相手を無視して  
イ 力で支配して  
ウ おさえ止めて  
エ 叱り飛ばして  
オ 即座に断って

問二 傍線部①「目が合うとすぐにうつむいてしまったので、表情までは読み取れなかった」とありますが、このときの「大野」の気持ちを五十字以内でわかりやすく答えなさい。

問三 傍線部②「からっぽのバッテリーボックスと誰もいないベンチが、ぼんやりと浮かぶだけだった」とありますが、この表現からうかがえるものとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア おさえられない怒り  
イ とりとめもないもの悲しさ  
ウ どうしようもない迷い  
エ さっぱりとした清々しさ  
オ はっきりとした不安

問四 傍線部③「右手で提げていたスポーツバッグを足元に、落とすように置いた」と同じ働きを持つ「ように」を含んだ文を次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 桜の花が私の合格を祝福するかのように咲き誇っている。
- イ 合格の喜びを思い出せるように合格掲示の前で写真を撮る。
- ウ 入学に際し初心を忘れないように原稿用紙に決意を書く。
- エ 入学式で大きな声で歌えるように校歌を家で練習する。
- オ 合格して気が抜けないように中学校の勉強の予習をする。

問五 傍線部④「大野の声は急にか細くなって、『だって……痛くて、たまんないんだよな……』と、さらに弱々しくなった」のはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア ここ一番のチャンスが来たというのに、自分の不注意のせいでこれまでの努力が無駄になってしまふことが情けなかったから。
- イ 大切な試合を指の怪我程度のささいなこと出ないと申し出たら、先生にひどく叱られてしまうのではないかと恐れたから。
- ウ ただでさえ皆からよく思われていないのに、万全の体調でない自分がミスしたらさらに非難されると怖じ気づいたから。
- エ 「少年」のために嘘をついて試合を辞退しようとしていたが、どこかで自分も出たい気持ちがあったため苦しかったから。
- オ 所詮自分はよそ者に過ぎないのであり、結局は身を引かざるを得ない立場にあるのだと自らの境遇を恨めしく感じたから。

問六 傍線部⑤「耳に聞こえてくる声は、自分の声ではないみたいにひらべったく、薄っぺらだった」のはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「大野」のことより自分のことしか考えていない言葉が、「少年」自身気に入らなかつたから。
- イ 「大野」を思いやった温かい言葉を、「少年」自身あまりに出来過ぎで恥ずかしいと感じたから。
- ウ 「大野」を気遣い強がり半分に発した言葉に、「少年」自身本心から納得していなかつたから。
- エ 「大野」との関係を取り繕う上辺だけの言葉が、「少年」自身悪意に満ちたものに思えたから。
- オ 「大野」に言った言葉は、「少年」自身本当は自分に向けての言葉だと薄々気づいていたから。

問七 傍線部⑥「捨てるつもりだった。シャツを用水路に放り込んで、大野にもう一度『がんばれよ』と言ってやって、その代わり、もう立ち止まらずに交差点をまっすぐ渡ろう、と思っていた」とありますが、ここからは「少年」のどのような決意がうかがえますか。三十文字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑦「言葉がつかえてほっとした」のはなぜですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「大野」が思い違いちがをしてくれたおかげで、逆に本当の思いを伝えることができたから。
- イ 「大野」が勝手に勘違いちがをしてくれおかげで、彼とうまく仲直りすることができたから。
- ウ 「大野」が早とちりしてくれおかげで、今までより高い目標を掲かげることができたから。
- エ 「大野」が都合のよい思い込みおんがえをしてくれたおかげで、彼に恩返しおんがえすることができたから。
- オ 「大野」が早合点はやがてんしてくれたおかげで、彼を前向きな気持ちにさせることができたから。

問九 本文の特徴とくちょうを説明したものとして適当なものにはAを、適当ではないものにはBを書きなさい。

- ア 「……」がセリフの中に多く用いられることで、登場人物達の言葉の奥おくにある複雑な心情がさりげなく示されている。
- イ 何かを補足説明するとき「――」が使われており、読者が情景を思い浮かべやすくなる工夫がなされている。
- ウ ある程度登場人物と距離きよりは取りつつも、視点は「少年」に据すえられており、「少年」の心の声も直接語られている。
- エ 文末表現が「た」「だ」という過去を表す言葉になっており、この話が過去の話であることが印象づけられている。
- オ 「少年」と「大野」の使う言葉が方言と標準語とで使い分けられており、二人の性格の違いが強調されている。

## 二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

だれかとだれかが出会って恋に落ちる恋愛は社会的な出来事です。普通、出来事とは呼びませんが、学校も社会的な出来事の一つだといえます。①日本という国家も、日本人や日本を外側で見ている人々の関係の中で起きている出来事だといえます。学校も国家も歴史の中で起き、継続している出来事なのです。社会をこうした出来事の積み重ねであると感ずることは、社会学的な感覚という意味で非常に大切です。さらにいうと、②社会的なつながり以前に存在するように思える自分という存在も、実は他人とのかかわりつつながりの中の出来事なのです。自分という存在は、他者とのかかわりの中にしか存在できません。小さい子どもが自分を指して「○○ちゃん」と言うことがあります。それは、だれかに呼びかけられる存在として、自分を発見するからです。成長した後でも、「あなたはだれ？」と問われたときに、だれの息子だとか、どんな職業だという他者や社会との関係で、自分はだれかということを考えざるをえません。「私」とは、社会的な関係の中で他者から呼びかけられる存在なのです。私らしさとかアイデンティティもその中でしか考えられませんか。だから、自分という存在もかかわりやつながりの一つのかたちでもあるのです。

「自分」とはなんであるのかは、社会によって異なっています。「私」が何代も前のおじいさんから生まれ変わり続けているような、生まれ変わりを信じる社会もあります。そこでは、私の中に私と同時に生まれ変わったおじいさんが存在していることが当たり前です。そういう社会では、私は今ここに生きている私だけではなくなるため、現代人と同じような意味でのアイデンティティは存在しないこととなります。このように、③アイデンティティも時代や場所によって変化します。現代において「私」という存在は、職業などの境遇を切り離れた「私自身」としても存在できません。しかし、江戸時代において、農民や侍といった身分と切り離して存在する「私」はありえません。身分に属することが、当時の社会的存在になる方法だからです。

インドのカースト制度でも、カーストを離れた存在はありえません。カースト制度に組みこまれることが、人が社会的な存在になる条件だからです。そこでは自分がどのカーストに属するかが、自分は何者なのかということと不可分な関係になっています。こう考えると、「自分」という存在の在り方も、社会によってかなり異なったものだというのがわかります。

一見すると反社会的、あるいは非社会的とも思われる孤独も、社会と切り離しては考えられませんが、孤独は他の人々とかかわりを断つて社会の外側に出ることですが、それが意味を持つのは、人が社会の中に存在しているからです。自分から進んで孤独を選択するということは、「かかわりを持たないというかかわりのかたち」を選択すること、ネガティブでマイナスの関係を選択するということです。いじめに

見られるような人を無視することも、社会的な意味を持ちます。かかわりを持たないこともまた、一つのかかわりのかたちであるからです。だから他人から無視されることは、<sup>④</sup>他人と強烈なかかわりを生むことになるのです。

こうしたつながりやかかわりが織り成す社会は、今・ここという時間や空間を超えて、さまざまなかたちで広がっています。例えば、A は昔から受け継がれてきたもので、今話している人々が自分<sup>a</sup>で生み出した言葉ではありません。それは歴史の積み重なりとして、いわば死者たちから受け継がれてきています。言葉はさまざまな考えのデータ<sup>注4</sup>ベース<sup>b</sup>であり、A を継承する中で日本人の思考パターンは規定されてきました。今を生きる我々も言葉を話すこと<sup>c</sup>で、現在の言葉を次の世代につない<sup>d</sup>でいきます。言語は時間と空間を超えるかかわりやつながりを生み出すのです。

私がここまでしてきた社会学をめぐる話も、「私の話」であると同時に、私に先立って存在し、社会について考えてきた数多くの社会学者や社会学者、哲学者<sup>てつがくしや</sup>や思想家たちの言葉が積み重なり、交錯<sup>こうさく</sup>して、私の中に流れこみ、私を通じて皆さんの前に現れたものということが出来ます。ここで話しているのは私という個人だけれど、同時に、私に先立つさまざまな人々の言葉が、ここ<sup>e</sup>で直接<sup>げんきゆう</sup>言及され、名前を挙げた以外の人々のものも含め、私を通じて語られているのです。

このように考えると、<sup>⑤</sup>社会を生きることとは、地図を見ることがと似ているかもしれせん。地図は世界の見えない全体を可視<sup>かし</sup>化します。社会を生きるとき、私たちは社会の全体を見ることはできませんが、その中に自分が存在することは知っています。私たちは今・ここを超える時間や空間の中のかかわりやつながりの広がりを生きていて、その見えない広がり「社会」という言葉で語り、イメージし、その中に自分を位置づけているのです。

(『社会とは何だろう』若林幹夫の文章による)

(注1) アイデンティティ…自分が思っている自分のこと。

(注2) カースト制度…インドにおける身分制度。

(注3) ネガティブ…否定的。

(注4) データベース…情報を再利用するため管理したもの。

問一 傍線部①「日本という国家も、日本人や日本を外側で見ている人々の関係の中で起きている出来事だといえます」とありますが、「国家」が「出来事」といえるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 日本を外国人の目から見れば、いつも変わった出来事が連続して起きている国だといえるから。

イ 日本に限らず国家を内側から見ると外側から見るか、当たり前前のことが不思議に見えるから。

ウ 国家も長い歴史の中で見れば、さまざまな出来事が継続的に起きていくように見えてくるから。

エ 外国との関係がなければ国家は成り立たないため、外から見られることを意識しなくてはならないから。

オ 国家には複雑で多様な面も備わっているので、あえて出来事と見なすことも不可能ではないから。

問二 傍線部②「社会的なつながり以前に存在するように思える自分」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 今ここに生きているというだけで、完全な自分だと言い切れるということ。

イ 職業などの社会的な立場がなくても、一人で生きていけるということ。

ウ 自分らしさというものさえあれば、社会はたいして重要ではないということ。

エ 周囲との人間関係に左右されずに、自分らしさを維持していけるということ。

オ 社会から認めてもらわなくても、既に自分の存在を感じられるということ。

問三 傍線部③「アイデンティティも時代や場所によって変化します」とありますが、それはなぜですか。簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部④「他人と強烈なかかわりを生むことになるのです」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 社会の中にいながらも、交際範囲を大きく制限されてしまうということ。

イ 社会の中にいながらも、社会的関係を積極的に断ち切られるということ。

ウ 社会の中にはいても、それまでの友人関係を改めさせられるということ。

エ 社会の外に出されてしまい、なんとか中に戻ろうと努めるということ。  
オ 社会の外に出されたために、二度と戻らない決意が生まれるということ。

問五 二重傍線部「で」と同じ働きをしているものを、本文中の傍線部 a～eの中から選んで記号で答えなさい。

問六 空欄 

A
---

 に入る漢字二字の言葉を自分で考えて答えなさい。

問七 傍線部⑤「社会を生きることとは、地図を見ることと似ている」とありますが、どのような点が「似ている」のですか。七十字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容と合っているものにはAを、そうでないものにはBをつけなさい。

- ア 「自分」とは何かという問題は、時代や地域に関係なく常に個人的で内面的な問題である。
- イ 学校とも職業とも無関係な人間であれば、社会から完全に孤立していた存在と考えるとよい。
- ウ 「自分」を説明しようとする、必ず誰かや何かとの関係の中でしか説明できなくなってしまう。
- エ 人間もモノも今・ここだけの存在ではなく、見えない過去や他の世界とのつながりを持っている。
- オ 言葉は昔からのものなので、それを使えば現代的で自由な発想を持つことはできなくなる。

問九 本文に「XとY」という題名をつける場合、X・Yにはどんな言葉が入りますか。本文中から適語を三字以内でそれぞれ探しなさい。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 親のかたきをウつ。
- ② エキチユウを利用して栽培を行う。
- ③ 絶体絶命のキキを脱する。
- ④ お目にかかれてコウエイです。
- ⑤ 川のシンセンを測る。

